

郷土館だより

Vol. 10 No. 1

1987. 10. 1



東海道浮世絵展 (三島～白須賀)

— 10月25日まで —

9月5日から開催している「東海道浮世絵展(三島～白須賀)」が好評です。

県の「しずおか文化の祭典'87、美術部門」に参加し、10月25日まで開きます。

広重の「東海道五十三次・保永堂版」「五十三次名所図会」など県内22宿と箱根の浮世絵、および東海道中栗毛弥次馬、大井川を渡る数々の場面など約110点を展示。

特に三島を描いた「東海道五十三次」隸書、行書版、「五十三駅」三島明神一の鳥居、役者見立絵、「末広五十三次」「雙筆五十三次」また、三島大社の田祭りを題材とした「東海道五十三対三島」正月六日三島祭りの図、肉筆浮世絵「正月六日三島踊」など珍しい版画を展示しています。

広重は天保3年(1832)、幕府の行列に随行

し東海道の旅をしました。その体験や印象をもとに二十数種の「東海道もの」を発表しました。中でも「保永堂版東海道五十三次」はたいへんな好評を得て、彼の代表作となりました。

◇写真＝隸書東海道十二 五十三次 三島

本図「隸書東海道」も人気シリーズの一つで、広重はこの中に洋風表現を巧みに取り入れたと言われています。

「三嶋の図」は、三嶋神社鳥居横から見おろした鳥瞰風景図です。鳥居前に2軒のはたごが見え、1軒にはわらじを脱いで上がろうとする1人の旅人、もう1軒の方には番頭の案内を聞く3人連れの旅人が描かれています。両はたごの間にある立木の前で、片手を上げている羽織姿の男は町役人でしょうか。宿場の賑わいが聞こえてきそうな風景です。

緒明家と楽寿園開園

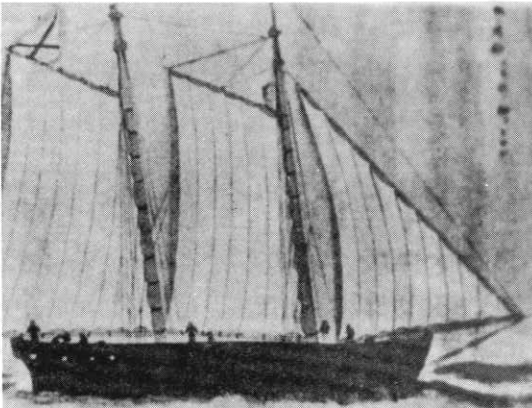
(楽寿園の歴史4)

今の楽寿園の土地は、昭和2年季王家より緒明家へ、買却されています。当時の金額で百万円近く出すことのできた豊かな家、緒明家の系譜をひもといてみますと、近代日本の造船界で活躍した家系であることがわかりました。

1、ヘダ号の建造と緒明家

安政元年(1854)12月2日、富士郡宮島村(現富士市)沖合で、一隻の西洋型帆船が、沈没しました。安政の大地震の時、下田港にて天津浪で破損したロシア使節プチャーチン旗艦のディアナ号です。この不幸な事件は日本にとって西洋造船技術を習得する又とない機会となりました。

帰国のために新たに船が建造されることになり、その場所として、伊豆西海岸の閑村、戸田村が選ばれました。幕府は惜しみなく援助を与え、ロシア人技術者の指導の下で、日本人船大工が全く未知の造船技術に取り組みました。約3か月かかって、総長81尺(約24メートル)のスクネール型帆船が完成します。この帆船は建造地名をとって「ヘダ号」と名付けられました。

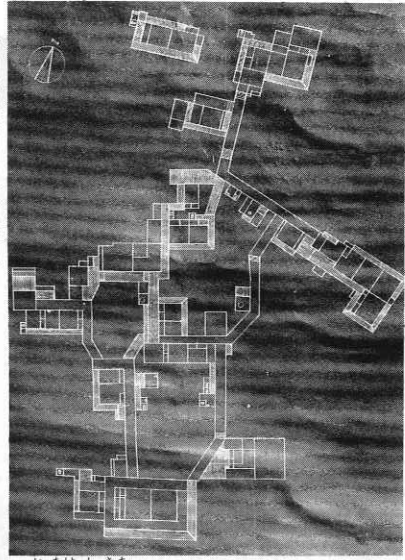


▲戸田村で造船された「ヘダ号」
わが国初の西洋型帆船

この後、日本人船大工だけで同型の船が次々建造されます。(「君沢型」と呼ばれる)ここに初めて西洋造船技術が修得されたのでした。

ヘダ号を建造した日本人船大工棟梁7人の

▶ 緒明家平面図(分離前)



1人が緒明嘉吉でした。ヘダ号の建造当時は尾明の姓であったのが、明治初年に改姓します。明治5年(1872)71歳で死亡、戸田村蓮華寺に埋葬されています。

その子菊三郎は、幼時より父に従いその技術を学びました。慶応4年(1868)8月、新政府軍に抵抗した榎本武揚が函館に向う旗艦開陽丸に修理工として乗船していました。しかし、父病気の便りで下船、五稜郭の戦いには参加していません。明治5年上京。造船業を経営するかたわら、永代橋・両国間に小蒸気船を運航し、隅田川一銭蒸気の緒を開き成功します。明治16年(1883)には、品川沖第四砲台跡を借用し、緒明造船所を設立。この後、日清・日露戦争で船舶の需要が高まり40隻近い船を造りました。大型木造船建造では日本一の座を占めたともいわれます。

また、明治23年(1890)に始めた海運業でも成功を納め、明治28年頃には汽船17隻、帆船数十隻を所有しています。菊三郎は明治42年(1909)に死亡します。

菊三郎のもとへ、天城の足立家より養子に入ったのが、緒明圭造です。圭造翁は、当時の錦田村にあった谷田城跡(現谷田城ノ内)を別邸として購入。ここでは菊栽培に熱心だったといわれ、翁の風流の一端をかき間みる

ことができます。狩猟も好きで、東京の名士達とよく天城の山々に入ったといわれます。

2、李王家別邸（楽寿園）の購入

大正末、李王家が別邸（現在の楽寿園）を三島町に売却しようとしたとき、約30万円といわれた金額を当時の三島町では捻出することができませんでした。（当時の年間予算は約28万円）東海の名園が分割されるのを惜しんだ翁は一括購入する決意します。金融恐慌のあおりを受け、結局100万円近くを支出して、昭和2年、別邸は緒明氏の所有となりました。

緒明氏は戦争が激しくなり、品川の本宅を焼失された後に、三島に生活拠点を移されたようです。

当時は、現在の公会堂から正門あたりにかけて、芝生の中に鳥小屋が置かれ、市民の目を楽しませていました。また、浅間神社の南側の土地は、遊園地として子供達に開放していました。緒明邸は市民の憧れの地でした。

戦後一時期、占領軍が楽寿館に駐留。ホールをペンキで塗るなど、かなり荒っぽく使用されたようです。

3、楽寿園開園

この後、市民から緒明氏庭園の公開を望む声が高まり、三島市の交渉の結果、翁の長子緒明太郎氏の好意で、昭和27年7月15日に売買交渉が成立。三島市立公園「楽寿園」として開園する運びとなりました。

このとき、建物・庭園は、かなり手加えられました。建物は、玄関の所で切り離され

楽寿の間等南の部分が市へ譲渡され、渡り廊下でつながれていた北側の建物は、緒明氏の居宅として残されます。ここには、明治天皇のご養育部屋を移したといわれる「梅御殿」、しゃれた茶室の「桜御殿」があります。現在は老朽化が激しく使用されていません。除去された玄関は緒明氏宅へ移築され、楽寿館側には新たな玄関が設けられました。

そして、正門からの園路が作られ、深池に赤橋がかけられ、新しい玄関前から食堂裏へ通じる道が整備されました。

後に遊園地として9200㎡を緒明氏より借用し、国有地の池を加え66000㎡の都市公園となっています。

4、文化財としての楽寿園

昭和29年3月には、熔岩上に発達した自然林がよく保存され湧水が清冽に湧出していることにより、国の天然記念物および名勝に指定されました。

現在、動物園・遊園地として多くの子供達に親しまれ、日本庭園は市民の憩いの場となっています。

ただ、小松宮がこよなく愛し李^{りきん}王^{わう}夫妻の心をなぐさめた小浜池の水が枯渇して久しく、夏の一時期のみ水面を現わす小浜池に楽寿館がよく映えます。この楽寿館は、現在一般公開され、明治の文化を今に伝えています。

（楽寿館・楽寿の間装飾絵画は昭和55年11月、県の文化財に指定され、また楽寿館（建築）は昭和49年11月に三島市の文化財に指定されています。）

【行事報告】

あかり展

6月14日(日)をもって、企画展「あかり展」を終了しました。幸いにも、会期中大きな話題を呼び、多くの方々に観ていただくことができました。

入館者数報告

年月日	開館日数	一般入館者	学生等	団体	月別計
62.5.3~5.31	29日	3670人	2947人	③660人	7277人
6.1~6.14	13日	1320人	430人	(8)440人	2190人
合計	42日	4990人	3377人	1100人	9467人



▲にぎわう「あかり展」会場

日本最古の土坑を展示

— 初音ヶ原B遺跡から出土 —



東海道松並木（川原ヶ谷）南側の初音ヶ原B遺跡で発見された、日本最古と思われる土坑を、いま、郷土館で展示しています＝写真右。

この土坑は、昨年10月20日から11月28日まで行なわれた発掘調査で発見された4基のうちの一つです。

日本で最も古いといわれた宮城県座散乱木（ぎざらぎ）遺跡の2万5千年前のものより、さらに2千年も古く、たいへんめずらしいものです。

落とし穴か貯蔵庫か……

上の写真は、丸い土坑の半分を切り取り、断面と4分の1の穴の部分を見せたものです。

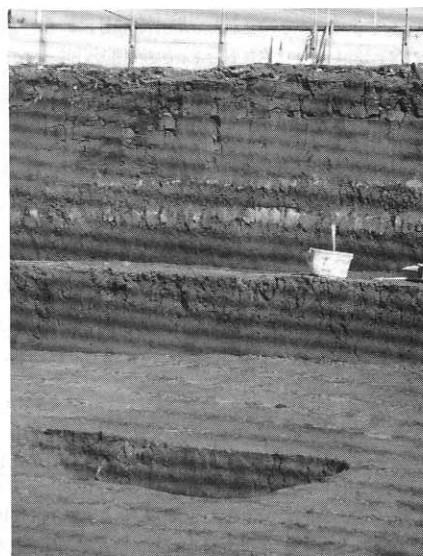
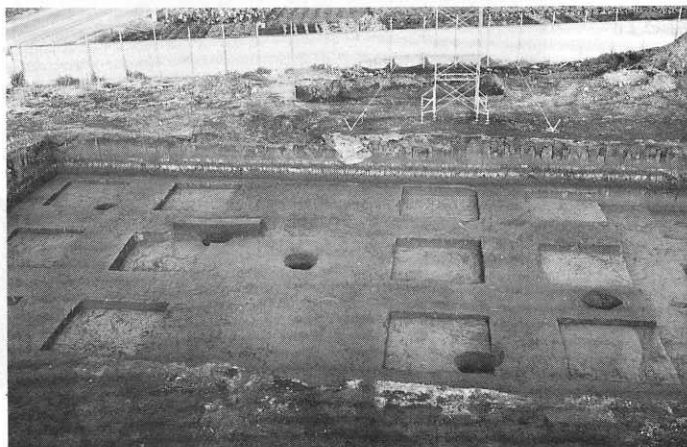
学術的な価値が高いことから永久保存するため、奈良文化財研究所の指定業者に依頼したもので、合成樹脂（プラスチック）を注入し土の剥落を防いでいます。費用は約90万円です。

4基の土坑は、いずれも地表から2尺30釐ぐらいのところまで直径80釐、深さは1尺から1尺40釐。食糧の貯蔵に使ったものか、獲物を捕るための落とし穴として使われたものかは

まだ分かっていません。発見された地層から2万7千年前の時代のものと想定されるものです。

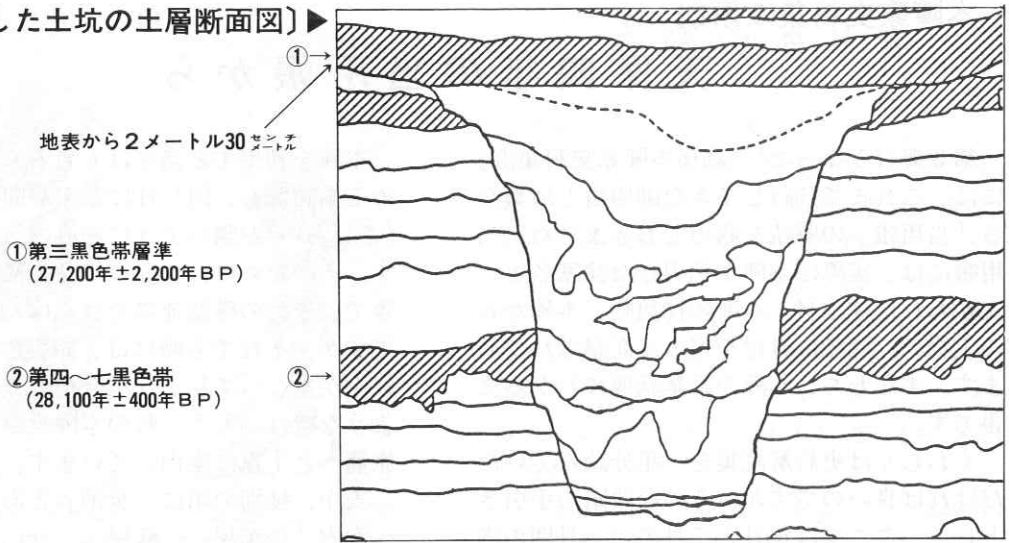
初音ヶ原遺跡は旧東海道松並木（川原ヶ谷）を挟んで南北にまたがっており、北側はナイフ形石器・尖頭器、縄文土器・石斧などが発掘されているA遺跡。南側が今回の土坑が見つかったB遺跡です。

この時代（先土器時代）箱根山ろくには35か所ほどの遺跡が確認されており、数々の遺物が発見されています。



発掘現場の全景（写真＝左）と展示土坑の検出状況（写真＝右）

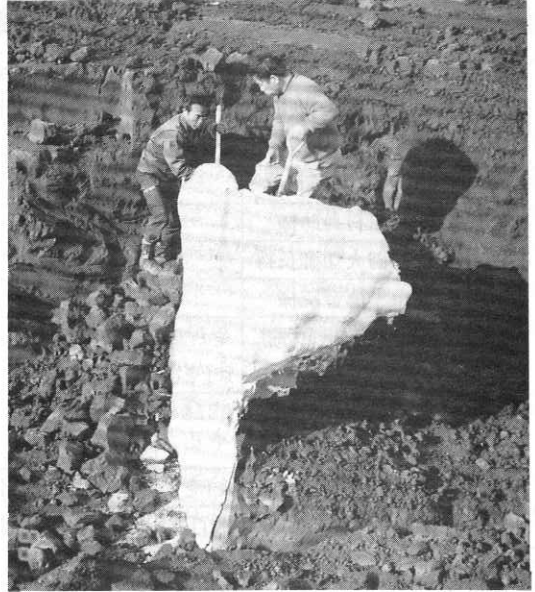
〔出土した土坑の土層断面図〕▶



B遺跡の発掘状況

B遺跡の発掘調査は創価学会三島礼拝所新築工事に伴って行なわれたもので、調査面積は610㎡。掘り進めていく中で、縄文時代包含層からは数片の縄文土器が出ましたがここでの遺構は検出されませんでした。さらに掘り下げ、先土器時代の第1文化層(約14,000年前)からナイフ形石器、細石刃等147点が見つかり、また、2万7千年前と思われる第3黒色帯層準から4基の土坑が現れたものです。4基は南北に大きな弧を描きながら4～7m間隔でありました。

土坑のまわりを削り、発泡スチロールを吹付けての取り出し作業(写真=右)



ひろば

お天王山まいり

7月10日、中央町のかたがたの小旅行がありました。行先は愛知県の津島さん。ここは東海地方を中心に、広く東日本一帯に天王信仰を広めた、お天王さんのメッカです。お天王さんは悪疫・害虫を追い払ってくれる神。

昔から、この神を祀る人々は、田植えが済んだ頃に天王祭を盛大に行い、無病息災

を祈願したものでした。今は田の無い中央町ですが、天王信仰は現代までしっかり受け継がれていました。



本陣家史料集(3)解説

天保四年の当用帳から

第3冊目となった『三島宿本陣家史料集(3)』には、これまで刊行してきた御用留とは異なる、「当用帳」の解説を取めておきました。当用帳には、実際に本陣を利用した諸家名と、支払われた休泊料、本陣の拝領物、本陣からの上物が、明細に日付を追って記録されています。すなわち、本陣の営業状態のわかる文書です。

くわしくは史料解説集を一年分読んでいただければ良いのですが、その前段階の手引きとして、ここでは正月と二月の二か月間の内容を表にまとめて、若干の解説をしてみます。

本陣を利用する諸家はもちろん、それを泊める本陣側も、同じ日に二家が同宿する差合(さしあい)が無いように細心の気配りをします。そのためには、前々より先触(さきふれ)等で、予約の確認連絡をひんばんに行なうのですが、それでも時には、旅程の都合で二家以上が重なってしまう場合があります。そのような時は、もう一軒の本陣世古家や、別の旅籠へと丁重に案内しています。

表中、種別の項に「世泊」とあるは世古家へ案内。「松葉屋」「萬屋」「ぜに屋」は、別旅籠へ案内して、差合を避けた例である。

天保4年 三島本陣宿泊の諸家休泊料一覧(正月、二月)

日付	諸家名	休泊料	名目	種別	日付	諸家名	休泊料	名目	種別
1月11日	勢州御代参 畠山中務大輔様	銀子壱包 銀子壱包	御茶代 上物料 中ひらめ壱本	小休	2月14日	六条御殿東 御役者衆	金貳朱	茶代 上物ツツ物 酒三合	泊
"	姫路 内藤半左衛門様			泊	14日	薩州様御隠居 薩摩三位榮翁御遺体	銀五枚 金三百疋	御宿料 別段	世泊
13日	紀州 田村兵助様			"	16日	紀州様御用物	鳥目貳百文	茶代 上物百文高付	泊
19日	紀州 御大切御長持			"	20日	東本願寺様御先御荷物			泊
20日	久能山 德音院様			通	20日	西本願寺様御内	鳥目三百文 "	萬屋江上物 式ツツ物 午前方へ 百十文高付	万屋泊
20日	京都御名代 宮原弾正大弼様	金百疋 銀子壱包	御宿料 御祝儀	泊	23日	久能山行 神宝方御長持			泊
22日	滝山寺 清龍院様	鳥目五拾疋	御茶代 上物高付	泊	26日	御勅使 甘露寺一位様	金百疋	御宿料上物	泊
26日	伊勢御代参 畠山中務大輔様	銀子壱包	御茶代	小休	26日	御勅使 徳大寺大納言様			世泊
29日	京都御差立 勅額御用物 外	貳百文	御茶代 上物なし	小休	27日	御院使 藤谷宰相様			小休
28日	薩州 調所笑左衛門様	金壱朱 唐せんす 式本	上物三島曆	松葉屋	27日	知音院 御宮様			世泊
2月 日	琉球人二付 御取締御普請役			小休	27日	知音院 御宮様 御長持			泊
4日	松平因幡守様 御供御家老	金貳百疋 金百疋	御宿料 世古へ	泊 世泊	28日	東本願寺御門跡様	金貳百疋 金百疋 金壱朱 金貳朱 金壱朱 御袴壱具	御休料 別段被下候 上物料 井田海苔 傳左衛門家督 万屋へ 拝領	休
8日	和州芝村 織田丹後守様	金貳百疋 金百疋 金貳朱	御宿料 御膳料 御弁当 伝左衛門家督上物	泊	28日	紀州様御宿割 田村兵助様 外			泊
9日	伏見奉行 本庄伊勢守様	金貳百疋	御宿料 上物不納	泊	29日	紀州様五日御先御長持			泊
13日	京都江御名代 宮原弾正大弼様	金百疋 白銀壱包 御袴壱具	御宿料 上物料 拝領	泊	29日	知音院御丈室様	白銀貳枚	御宿料	泊
14日	六条御殿東 下間刑部卿様			通					

本陣の泊り客



「当用帳」の原本

左 表紙 天保四年 当用帳 巳 正月吉日

右 裏表紙 樋口佐左衛門 正晴花押

解りにくいのは休泊料です。利用した諸家諸侯が、思い思いの料金を、種々の名目で置いて行くのみで、定料金がありませんでした。銀子壺包、金、白銀、鳥目等々。

休泊料にとまなう各種の名目には次のようなものがあります。小休の時は「御茶代」宿泊は「御宿料」そのほかに「御祝儀」「上物料」など、その都度諸侯のふところ次第で決まります。

上物（あげもの）とは、本陣側から差しあげる、いわゆるお持たせの手みやげである。魚、三島暦など、その時節に応じた産物を差し出していたようです。

本陣に泊ったり、休息したりすることのできるのは大名、公卿、勅使、宮、代官、大名奥方、大名女中、奉行、門跡、門主、茶壺、旗本、幕府の役人及び外国使臣などの、いわゆる特権階級でした。一般には、本陣と大名行列が、すぐ結び付き易く、いつも大名ばかりが宿泊していたように理解されがちですが、実際には大名行列はそれほど多くなく、普段は表のような役人や、大名荷物などが主な泊り客だったものです。

表中(2月の項)にもあるように、琉球使節をはじめ、国交のあったオランダ人一行、朝鮮信使などの外国人も本陣の利用客でした。琉球使節の場合は、将軍の代替りや幕府に慶事があるときなど、王子が正使となり、70人~100人ぐらいの一行で来朝したと言われます。一行は那覇から船で坊津または山川の港に着き、鹿児島島の琉球館を経て、瀬戸内海を船で大阪にのぼり、大阪からは陸路をとっていました。東海道の道中では、琉球衣服をつけて悠々と琉球楽を奏しながら下ったもので、沿道の人々は好奇の眼をみはったものだったと伝えられています。

変わった宿泊客では、2月14日の薩州様御隠居御遺体（世古本陣泊）でしょう。江戸で亡くなり国元へ帰る途次と推察されます。謝礼は銀5枚とありますが、多くもらっても、本陣側には気疲れの多い泊り客であったようです。

史・資収集記録

資 料 名	分 類	提 供 者	収 集 日
雑 誌 帳	書籍、文書	鈴 川 憲 二氏 (沼津市)	62. 4. 10
三 島 町 誌 稿	書籍、文書	阿 部 英 雄氏 (東京・中央区)	62. 4. 20
た ん す	民 俗	浅 賀 隆氏 (三島市)	62. 4. 28
鋤	民 俗	高 田 和 美氏 (三島市)	62. 5. 9
重 箱	民 俗	三 田 ち 彥氏 (三島市)	62. 6. 11



親子で作った縄文土器を展示

10月1日から11月4日まで。3階の千枚原遺跡から出土した土器の隣りに展示します。出品は、夏に郷土館で催した親子縄文土器作り教室に参加した小学校4～6年生の親子=写真約30点。

(※10月17日・18日は市民体育館での住まいと緑の総合フェスティバルに展示)

土器づくり……は、7月24日に子どもが土を練り、同26日親子で土器の形を作り、8月27日郷土館前で野焼きを行い完成させたものです。親が熱心な組、子ども一人ががんばる組など形作りの親子の関り合いはさ

まざま。「焼成」の日、高々と焼き上った炎が下火となり、灰の中から出てきた土器はいずれも赤褐色の風格ある作品となりました。家族の歴史の1ページを飾ることになるでしょう。



● 三島の水を勉強

8月13日、中学生を対象とした“三島の水めぐり”を行いました。コースは小浜池・水泉園(写真)・桜川・源兵衛川・四の宮川・千貫樋・温水池・青木橋・境川旧河道・岩崎用水・祇園用水等。若い世代に郷土三島の水の歴史を伝えたいという講師(郷土館運営委員秋津亘氏)の熱意ある説明に、中学生たちは真剣にメモをとっていました。

◇ 編集後記 ◇

新たに小田治正館長が着任してから6か月。多くの市民が気軽に訪れる郷土館にしたいという館長を中心に、職員一同(4人)張り切っています。

なお、前館長永沼朋康氏は市・商工課へ異動。商工行政に力を尽くしています。

子ども郷土館教室

日時 6月23日(火)「郷土の日」(三島市)
10～12時、13～15時の2回。

参加者 午前600人、午後200人

内容 映画「わが街三島」、
郷土館展示案内、楽寿館見学

市内の小・中学校の一斉休校日「郷土の日」に合わせ、郷土三島をよく知ってもらおうと、ことし初めて実施しました。子供だけでなく親の参加も目立ち、予想以上の盛況にうれしい悲鳴を上げました。小学校1年生の子供たちが、目を輝かして聞き入る姿がとても印象的でした。

利用案内

休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日

開館時間 午前9時～午後4時30分

入場無料 (但し、楽寿園入場の際、有料)

郷土館だより No.28

昭和62年10月1日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
(楽寿園内)
TEL 0559-71-8228
発行 三島市教育委員会